

## 学位論文の要約

論文題目 初期鎌倉幕府と北条氏

申請者 山本 みなみ

執権政治の成立時期については、建暦3年(1213)の和田合戦後、北条義時が侍所別当と政所別当を兼務し、執権職に制度的裏付けを得た点を重視する佐藤進一氏の見解と、建仁3年(1203)の比企氏の乱(小御所合戦)後、北条時政が政所別当に就任した点に画期を見出す上横手雅敬氏の見解がある。佐藤氏は制度的分析に主眼を置くため、もっとも重要な將軍権力と北条氏との政治的関係についての考察が不足している。一方、上横手氏は執権政治の成立過程を公武関係のなかで捉えるため、幕府内部で起こった個々の事件については論究が不足している。本書では、このような研究状況を鑑み、頼朝の死後に相次いで起こった政争や將軍の身体的問題を検討することで、執権政治の成立過程を將軍と執権北条氏の政治的関係を中心に解明する。

まず、第1章「頼朝死後の鎌倉幕府と北条氏」では、源氏將軍(頼朝・頼家)の独裁政治が強固な権力を誇ったにもかかわらず、執権政治に移行した背景を論じている。とくに、頼家の引退と執権政治成立の契機として重要であるのは、建仁3年(1203)の小御所合戦である。この合戦は、北条時政の軍事クーデターと評価することができ、時政は頼家を廃し、幼い実朝を擁立することに成功した。しかし、武力による將軍の擁立は、おのずと將軍権威の低下をもたらした。この結果、將軍独裁政治は終焉を迎え、時政による専制(執権政治)が敷かれたと考える。ただし、時政は直ちに権力を確立したわけではなく、頼家・一幡父子の抹殺や低下した將軍権威の補強(実朝の征夷大將軍就任・坊門家との婚姻成立)など、さまざまな政治的課題を克服しなければならなかった。従来、北条氏の権力掌握は自明視されていたが、時政は頼朝の死後すぐに権力を確立したわけではなく、幕府運営の安定を最優先にしつつ、自家の権力確立にも力を注いだのである。

また、時政には後妻・牧の方とのあいだに男子政範がいたが、彼が夭折したために、將軍後見の立場(執権職)は北条氏の家督とともに、先妻との子・義時に継承されることが明白となった。時政は、牧の方の意向もあって、娘婿・平賀朝雅の擁立を謀るが、事態をいち早く察知した政子・義時の妨害によって、未遂に終わり、隠退を余儀なくされた。この結果、幕府は政子・義時兄弟によって運営されることとなる。

時政による専制が成立した意義は、幼少の將軍を北条氏が補佐する雛形が形成された点に求められる。これ以後、北条氏はこの雛形に基づき、將軍の成長に左右されない政治体制の構築を目指すこととなり、この延長線上に義時の執権政治が登場すると考える。

第2章「和田合戦再考」では、建暦3年(1213)に起こった和田合戦を検討し、將軍実朝と執権北条氏にとっての合戦の政治的意義を考察した。近年の実朝研究は、合戦の結果、実朝が將軍権力を確立させたと説くが、むしろ実朝は重臣・和田氏を失い、より北条氏に依存

せざるを得ない状況に置かれたと考える。一方、執権義時は、和田氏を滅ぼすことで、より実朝の周囲を執権勢力で囲繞することに成功したうえ、三浦一門の勢力を削ぐことで北条氏の地位を安定に導いた。

第3章「北条時政とその娘たち―牧の方の再評価―」では、北条時政と後妻・牧の方の間に生まれた娘たちを検討した。娘たちの年齢や婚姻相手を整理した結果、時政が鎌倉で実朝の後見役（執権）として台頭する一方、娘たちと貴族との婚姻を積極的に進め、京都との密接な関係を構築していたことを明らかにした。この婚姻が実現したのは、牧の方のもつ人脈によるところが大きい。とくに、時政の娘と坊門家との婚姻は、実朝と坊門家との婚姻の前提となっており、この婚姻の結果、実朝は後鳥羽院と義兄弟の関係となり、公武融和の時代を迎える。従来、牧の方は平賀朝雅擁立の一件（牧氏の策謀）から悪女のイメージが強いが、時政の専制をその人脈をもって支えるという重要な役割を担っていたのである。

第4章「慈円書状をめぐる諸問題」では、『鎌倉遺文』未収載の慈円書状2通の検討を通して、実朝が暫く鎌倉に籠り京都からの訴えを成敗できないという状況が生じていたこと、実朝期に上洛計画があったこと、四天王寺の金堂・塔婆の修造に頼朝をはじめ、文覚・重源が関与していたことなど、幕府政治史の一端を明らかにした。これらの史実は、いずれも『吾妻鏡』からは、知り得ない情報であるだけに貴重である。

とくに、実朝が疱瘡罹患から3年もの間、疱瘡の跡を憚って幕府にとって重要な鶴岡八幡宮への参詣や二所詣を控えていたことは、実朝の将軍権力を見定めるうえで重要な手がかりとなる。五味文彦氏や坂井孝一氏は、この時期を「実朝のハレの時期」と捉え、実朝を有能な政治家として高く評価するが、幕府祭祀さえ十分に行うことのできない実朝が果たして幕政を主導することができたのか疑問である。もはや、実朝が執権義時や大江広元の協力なくして幕府を主導することは不可能であり、実朝が成長したのちも義時が執権政治を継続することができた背景のひとつに実朝の身体的問題があったと考えられる。義時は、寺社への参詣を控えている実朝の代理として奉幣使を務めたり、武芸への関心を失った実朝を諫めるなど、幕府の安定を最優先に考えて行動している。このような義時の行動は、将軍と北条氏が常に対立しているわけではなく、共存・補完の関係にもあることを示すものである。

また、実朝の上洛が計画され、その風聞が京都に住む慈円の耳にも届いていたことは、この時期の公武関係を考えるうえでも重要な事実である。実朝の上洛計画については、『沙石集』に記述があるが、従来の幕府研究において、この説話は等閑視されてきた。しかし、慈円書状によって、ある程度の史実を反映させた内容であると評価することができる。おそらく、上洛計画が持ち上がったものの、直後に泉親衡の策謀が発覚し、計画は白紙に戻されたと考えられる。

第5章「北条義時の死と前後の政情」では、新史料を用いて、毒殺や他殺など諸説ある義時の死因が病死であることを論じた。また、名越朝時が独自に父・義時の追善仏事を行っていたことを明らかにし、鎌倉後期に表面化する得宗家（北条氏嫡流）と名越氏の対立が北条氏の家督（義時の後継）をめぐる泰時と朝時の対立に端を発することを指摘した。従来、

義時の後継をめぐる争いについては、伊賀氏（義時室）とその子政村に注目が集まるが、朝時の動向も見逃せない。家督継承にあたって、泰時の地位を脅かしたのは、政村だけではなかったのである。このように、北条氏は必ずしも一枚岩ではなく、嫡庶の対立が内在していた。ゆえに執権政治は、一族間の内部対立によって瓦解する可能性を秘めており、泰時は一族融和に心を砕きながら、得宗家の権力を確立せねばならなかったといえる。

また、義時の死が社会に与えた影響や追善仏事を検討し、政子による義時権威化工作を高く評価した。政子は、義時の法華堂を頼朝のそれと並んで建立することで、義時を権威化し、かつ源氏将軍家と北条氏の一体化を図ったと考えられる。この結果、義時は頼朝に匹敵する人物として認識され、幕府の創設者として頼朝とともに評価されることとなった。義時法華堂が、焼失の度に再建され、歴代執権の参詣を得ていたことは、法華堂が北条氏による幕府支配（執権政治）の正当性を補完する機能を有していたことを意味する。

以上、本論文では、執権政治の成立過程を将軍と執権北条氏の政治的關係に主眼を置いて考察した。とくに、近年の実朝研究は、実朝が有能な政治家で、執権に対抗して将軍権力の確立を目指したと主張し、将軍と執権とを対立的に捉えるが、むしろ義時は身体的問題を抱えていた実朝の将軍権力を補完し、幕政の安定に心を砕いている。このような共存・補完の關係も踏まえて、実朝の将軍権力を吟味する必要がある。